

## 英米文化学会第85回例会のお知らせ

標記の例会を下記要領にて開催します。

◆開催年月日：平成6年6月18日（土）

◆時 間：3：00～6：00

◆場 所：日本大学歯学部3号館第7講堂（3階）（お茶の水ニコライ堂隣）

◆研究発表

1. 『ユニコーン』に見られる神と善の問題

横山 千枝子（埼玉県立羽生高校）

—ハナとマックスの関係を中心に—

司会 吉田 俊実（法政大学）

2. An Example of Action Research, Using Sub-titled Video, in the FLT Classroom

伊東 田恵（レイクランド大学日本校）

司会 増澤 史子（昭和女子大学）

3. ヘンリー・ジェームズ：The Ambassadors の構造分析

石川 伊佐夫（樹彦学園横浜大学）

司会 上野 和子（昭和女子大学短期大学部）

## 臨時総会開催のお知らせ

来る6月18日の例会終了後に臨時総会を開催しますので多数の会員の出席をお願いいたします。

## 英米文化学会第12回大会のお知らせ

標記の大会を下記要領にて開催します。

◆開催年月日：平成6年8月25日（木）・26日（金）

◆場 所：函 館 大 学（〒042 函館市高丘町51-1 電話 0138-57-1181）

◆宿 泊 先：ホテル第2オーシャン（JR函館駅前）

第1日 8月25日

受付開始：16：00

挨拶：16：30～16：45 函館大学学長 河村 博旨

講演：16：45～18：15 拓殖大学教授 名和 雄次郎

演題：認知心理学の知見を生かした英語指導法

## —本号の主な内容—

第85回例会研究発表レジメ・・・・・・・・・・ pp. 2-3

第12回大会研究発表レジメ・・・・・・・・・・ pp. 3-5

学会企画による英語テキスト出版のお知らせ・・・・ p. 5

第六分科会発足と会員募集のお知らせ・・・・・・ p. 6

☆ 第12回大会参加に関わる航空機・ホテル宿泊申し込みについて、別紙が同封されていますので必ずご覧ください

## お 願 い

本会報と同時に、本年8月25日、26日に函館で開催される第12回大会参加申し込み（ホテル第2オーシャン宿泊・往路の航空機）用の費用振込用紙をお送りいたしますので、お目にお申し込みください。また、6年度までの英米文化学会費未納の会員の皆様は、同じ振込用紙にて会費の納入をお願いいたします。

第2日 8月26日

研究発表 9:40~15:50

1. ミルトンの『教育論』に見られる紳士教育  
—その現代的意義— 大西 章夫 (中央大学大学院)  
司会 曾村 充利 (法政大学)
2. 『マクベス』の魔女に込められた政治的メッセージ 越智 敏之 (工学院大学)  
司会 門野 泉 (清泉女子大学)  
齋藤 博 (拓殖大学)
3. 〈Have+O+P.P.〉型の授業での取り扱い方 司会 伊澤 章 (拓殖大学)  
杉馬 健一 (国学院大学)
4. 開花に向かうサンフランシスコ文化  
—1880年代から1906年の大地震まで— 司会 古澤 寛行 (昭和女子大学)
5. Henry James: *The Bench of Desolation* のテーマと「視点」の手法 大東 俊一 (法政大学)  
司会 大島 良行 (専修大学)
6. ビデオ字幕の教育的利用法とその効果  
—第四分科会 (英語教育) 共同研究報告—  
発表者 藤田 牧子 (神奈川県立衛生短期大学付属 厚川高等学校)  
平川 敦子 (立正大学)  
中野 陽子 (星美短期大学)  
司会 石田 雅近 (清泉女子大学)

大会事務局: 佐藤英語研究室 〒107 東京都千代田区神田駿河台1-8-13 日本大学歯学部  
電話 03-3219-8160 (直通)

### 第85回例会研究発表レジメ

1. 『ユニコーン』に見られる神と善の問題 横山 千枝子  
—ハナとマックスの関係を中心に—  
マードックは、愛とは、他者を認識し、他者を自分と対等な存在とみなし、他者を尊敬することだ、と考えている。そして、愛は、神を〈注視〉することによって得られると考えている。この愛の発生する境地をマードックは、神であり善であると考えているのではないかと思われる。マードックは、神も、善も、遠く離れた彼方にある、万物の調和の一点と考えている。  
『ユニコーン』において、ゲイズ邸に住む女主人公ハナは、苦しむことの中に安住し、他者を各々幻想に捉えていて、自己を偽りの神と考え破滅して、死んでいく。また、その向い側にあるライダーズ邸の住人でプラトン学者のマックスも、他者を見ることができず、本と老齢にとらわれ、善の境地を知らないまま、ハナの死の相続人となっていく。  
ここで、二者を中心に、マードックが、神と善を同一に捉えていたことを論証したい。
2. An Example of Action Research, Using Sub-titled Video, in the ELT Classroom 伊東 田恵  
Every teacher has to decide for his or herself which materials and methods are best for his or her students. Professor Henry Widdowson of the London Institute of Education emphasizes the need for every teacher to undertake "Action Research" (i.e. the use of a rational methodology) when evaluating materials and methods, rather than relying on intuition.  
This presentation describes how action research can be applied to a learning module whose aim is to improve communicative skills. The module uses a sub-titled video to set the context of the students' activities. The aim of the action research is to determine whether a video with full subtitles is better than a video with summary subtitles.

### 3. ヘンリー・ジェイムズ: *The Ambassadors* の構造分析

石山 伊佐夫

ヘンリー・ジェイムズは多作の作家であった。が、あまたある作品の中でも、とりわけこの *The Ambassadors* を彼自身「率直に言ってほとんど最上、完璧な」小説と考えたことは、ジェイムズのようにある種のあやうい均衡の上にその実生活も、創作生活も成り立っていた作家にとっては、きわめて自然なことのように思われる。‘シンメトリーの権化’とでも呼びたいジェイムズの卓抜な小説技法を——それはこの作品で最高度に結晶したと思われるのだが——作中に傾出する ‘free’, ‘freedom’ という言葉をテコにして解明してみたい。また、‘視点の統一’ のマジックのタネ明かしまでできればと考えている。

## 第12回大会研究発表レジュメ

### 1. ミルトンの『教育論』に見られる紳士教育

大西 章夫

#### —その現代的意義—

『失楽園』の詩人ミルトンは、清教徒のイメージや敵を論破する口調から、生真面目で狭量、自尊心の固まりとの見方が定着している。しかし実際の「人間ミルトン」は、洗練されたユーモアのセンスと機知に富んだ穏やかな性格の持ち主だった。今回の発表では、三十代半ばの著作『教育論』 (*Of Education*, 1644) で示した教育観を軸に、ミルトンの理想の「紳士」像を検討し、併せてミルトンの先入観的イメージを考え直していきたい。

『教育論』の主題は「良き紳士の育成」即ち「高位者の義務」 (*notlesse oblige*) を自覚し、英雄的美徳を備えた指導者の完成だった。その教育対象は「わが国の貴族と郷紳の子弟」 ('our noble and gentle youth') と表現されるが、階級的に限定されたわけではない。想定される「貴族」とは、「紳士」たる素養と責任感を持つ、「精神的貴族」である。発表では、三人叙事詩の主人公描写につながるミルトンの「紳士」像を浮き彫りにする。

『教育論』の「実践的教育方法」も見落とせない。17世紀欧州教育界の泰斗コメニウスの理念に影響を受けつつ、宗教的・道徳的訓育の重視、目的でなく手段としての語学教育、五感に感じられることから抽象的事物へという、「学習の体系化」など、反スコラの意見が『教育論』では主張されている。これを突きつめて考察すると、ミルトンの手になるこの17世紀のパンフレットは、現代の大学教育を考える上で有益な示唆を与えてくれよう。

### 2. 『マクベス』の魔女に込められた政治的メッセージ

越智 敏之

1605年、ジェームズ一世がオックスフォードに行幸したさい、セント・ジョンズ大学で三人の女性が歓迎の辞を述べ、一行を迎え入れた。この演出は、ジェームズ一世の祖先とされるバンクォーに、三人のWeird Sistersが、子孫が王になると予言したことをふまえてのものだった。つまりステュアート王家にとってWeird Sistersは、王位を継承するうえでの神話的根拠を付与してくれた、政治的に重要な存在と言える。

1606年、シェイクスピアは *Macbeth* のなかで、そのWeird Sistersに魔女のイメージを与えてしまう。しかもノースベリック事件からも題材を得ているのだ。ノースベリック事件とは、1590年、当時ジェームズ六世だった国王を、魔女の一群が襲ったとされる事件だ。国王が魔女の存在を信じるようになったのはこの事件以来のことである。この発表では、挑発的ともとれるこの行為を行なったシェイクスピアの真意はどこにあるのかを、考えてみたい。

### 3. (Have+O+P.P.) 型の授業での取り扱い方

斎藤 博

内外の文法書にも辞典にも、この型の部分的乃至は断片的解説は見られても、総合的説明を行なっているものは皆無に近い。然し英米と日本とでは、包括的な解説を「行なっていない」意味には根本的な違いがある。英語国民にとっては、日常極めてself-evidentな表現であっても、英語を外国語として学ぶ日本の学生にとっては、何か体系的な包括説明がなければ、そのRecognitionもProductionも容易でない場合が生じる。書物によっては正確を期する余り、初学者にとり必要以上に細分化した複雑な説明となっている。そこで動詞haveの「有

意思」的意義と「没意思」的意義に着目し、更にObject+Present ParticipleというNexus-Objectに対し、進行形の諸用法に関するAspect面からの考察を加え、授業では説明を極力簡略化し（1）使役的継「断」統、（2）使役的近接未来、（3）受動的継「断」統、（4）受動的近接未来、に四分類しその理解並びに運用の容易化を計りたい。

#### 4. 開花に向かうサンフランシスコ文化

有馬 健一

— 1880年代から1906年の大地震まで —

ゴールド・ラッシュ以前は人口1,000人以下の漁村に過ぎなかったサンフランシスコは類例のないほど急速に発展し、1890年には既に240,000人の人口を擁する、全米で9番目の都市になっていた。金融や各種産業の繁栄に裏打ちされたその文化は1870, 80年代を経てローカルなものから洗練され且つインターナショナルなものへと変化していく。

1890年代のサンフランシスコには自由の気風を求めてニューヨーク、ボストン、シカゴから人材が集まって来ていた。また1880年代にヨーロッパ各地で芸術や文化を学んだ若者たちも戻っていた。彼らは因習や従来の文化的ローカリズムと陳腐さを否定し、建築、造園、写真、イラストレーション、ジャーナリズム、美術、文芸等の各分野で活躍するようになる。特にその活動は、前年のシカゴ博覧会を追うように1894年初頭からゴールデン・ゲート公園で開催され2百万人以上の客を集めたミッド・ウィンター・フェア一辺りを境に活気を帯び始めた。彼らはカリフォルニアの大自然そして太平洋や彼方の日本をも充分意識していた。また彼らは自分たちの作り出す文化が極めて折衷主義的なものであることを知りながらも、何が似非で何が本物かを（前述のフェアさえ槍玉に挙がる）真摯に探ろうとしていたと言えるだろう。本発表ではサンフランシスコの幾つかの建物やそれにまつわる人々（建築家ウイリス・ボーク、写真家アーノルド・ゲンス等）に焦点を当て、この文化が宿命的に持つ折衷性について、さらには20世紀のモダニズムとの関連について論じてみたい。

#### 5. Henry James: *The Bench of Desolation* のテーマと「視点」の手法

大東 俊一

*The Bench of Desolation* (『荒涼のベンチ』1910年) はジェームズの作品の中でも、奇妙に評価の分かれる作品である。婚約不履行を理由に婚約者から大金をもぎとった女が、10数年後、それを5倍にして男のもとへ戻って来て、その大金を、孤独な貧乏生活を送っている男に、受け取るよう差し出す。そして、さらに驚いたことに、女は昔あのようにお金を強要したのは、実はこのようにするためであったと述べる。全部で6章構成のこの作品は、第1章から第3章までが主人公の男Herbert Doddの回想であり、第4章以降が現在時から出来事の進行を伝えている。全体を通していわゆる視点の手法が用いられ、Herbert Doddに視座を置いて物語の進展が語られている。

これまでこの作品に関しては、プロットにまつわるさまざまな不自然さが指摘されてきたが、その一方で、ジェームズの作品中最もすぐれたものとする評価も散見される。本発表では、視点の手法による効果を検討しながら、“love story”としてのこの作品の意義を論じてみようと思う。

#### 6. ビデオ字幕の教育的利用法とその効果

— 第四分科会（英語教育）共同研究報告 —

発表者 藤田 牧子

平川 敦子

中野 陽子

英語教師にとって理想的なビデオ教材は、authenticで、しかも学習者がそれほど苦勞せずに理解できる英語が使われているもの、内容が面白いもの、そして日本語字幕のついていないものであろう。しかし現実問題として、最も安価で簡単に、しかも自分の気に入った内容のものが入手できるのは、一般に市販されている日本語字幕つき映画ビデオである。そこで第四分科会では、もっと前向きに日本語字幕をとらえ、積極的に教育目的に利用できないか、という観点で共同研究を行なった。今回の発表では、日本語の字幕スーパーが英語学習

者にどういう役割を果たしているか、というテーマで試みた共同実験の結果を報告したい。また、最近市販されている英語学習字幕つき教材用ビデオのほうも大いに魅力があり、これについては、聞き取り練習のみならず、速読練習、構文説明、自由英作文の練習など様々な発展的 activities に活用した実践例を併せて発表した。

### 学会企画による英語テキスト出版のお知らせ

本年5月1日、英米文化学会の以下の先生方のご尽力により、下記の英語テキストが出版されました。全14課からなる同書は、各課に、詳しい解説と注釈が施され、Comprehension Checkがつけられていますし写真も多用されていますので、大変興味深く読め進めることができます。つきましては、多数の会員の皆様に是非ご利用いただきたく宜しく願いいたします。(中村 豪)

#### 記

*WORDS TO REMEMBER Great Speeches, Letters and Diaries* (桐原書店刊)

編注者：石井 有美、石田 雅近、倉崎 祥子、高取 清、日高 正司、藤田 牧子

定価：580円

“My fellow Americans: ask not what your country can do for you--ask what you can do for your country.”

これは、本書の14ページに出てくる故ケネディ大統領の就任演説の一節ですが、この対象を日本人としても同じことです。私たちはいついかなる時でも、自分のためと同時に、自分以外の人のためにも何かをなさなければならない存在です。

本書に登場する8歳のアメリカの少女ヴァージニア・オハンロンは、“Is there a Santa Claus?”という手紙をニューヨークのサン新聞社に出しました。それがきっかけとなって、クリスマスが近づくと、いまでもアメリカの新聞や雑誌に繰り返し掲載される最も有名な社説 (p. 26~p. 28) が書かれたのです。これは単なる偶然の出来事ではなく、8歳の少女のひたむきな行動が生み出した現実です。時や場所や状況は違っても、このような歴史に残る行動を起こした人々の切実な言葉が、本書にはいっぱいつまっています。(同書「はしがき」より)

### 事務局からのお知らせ

--会員の動き--

#### ◆新入会員

#### ★住所の移動など

**研究発表申し込みの締め切り日について**

『英語青年』等の雑誌に例会開催予告をお願いする関係上、第86回例会より、研究発表申し込みは例会開催日より3箇月前までをお願いいたします。

**学術委員会・編集委員会からのお願い**

今年度も『英米文化』に掲載する論文を募りますので10月末日までに学術委員会（相良英明宛）へお寄せくださいようお願いいたします。また、『英米文化』用の原稿や会報掲載用の原稿はなるべくワープロ/パソコンによるフロッピーでお出してください。その場合にも、印刷した原稿を添付のほどお願いいたします。なお、フロッピーで提出される時の書式を次の会報に掲載の予定です。

**会費納入のお願い**

平成6年度会費未納の場合には、同封の振替用紙（函館大会参加フライト代等の支払い兼用）にてご納入くださいようお願いいたします。年会費は3,000円です。（財務担当石川郁二先生より）

**第六分科会発足のお知らせ**

この度、第六分科会が発足しましたのでお知らせいたします。平成6年4月現在で、英米文化学会会員の半数以上がワープロまたはパソコンを保有し利用中ですが、ワードプロセッシングのみに用途が限られている方も多く、パソコンの能力のごく一部を活用するにとどまっているのが実情と思われれます。つきましては、「宝の持ち腐れ状態から脱却したい」、「研究中のテキストの入力・検索をして分析の能率を向上させ、研究に役立てたい」とお考えのユーザーの皆様は下記の、第六分科会の目的をご理解のうえ、ふるってご参加ください。なお、発起人代表は佐藤治夫先生です。

**第六分科会の目的**

当分科会は、コンピュータを利用して研究の質・量の向上を目指すものとする。研究方法・手段を検討することを趣旨とするため、参加希望者の専門分野は問わない。特定の作品、テキストについて分科会全体での出版は考えず、あくまで、文学、語学等の人文系の学問分野における方法論の一つを真剣に検討する分科会である。参加者は、本目的達成のために、以下の活動のいずれかを希望していること、また、コンピュータを所有しているか購入を予定していることが前提となる。「二」の学習については分科会内の講習会を多数開催する予定であるので、プログラミング未経験者でも「できるようになるまで」アドバイスが受けられることになる。

**一、研究への応用例の検討**

コンコーダンス作成（自家版、出版を含む）、テキスト分析ならびに検索（出現単語のリストアップ、頻度等の研究を含む）、データベースの構築、その他

**二、使用方法の学習**

パソコンのセットアップ方法、テキスト分析用プログラミング、テキスト入力方法（スキャニングによる読み取り=OCR）、電話回線による通信方法、テキスト分析用の各種プログラムの使用方法、その他

参加申し込み方法：会員募集は6月18日を締め切り日といたします。コンピュータ購入予定者は、申し込み時点で所有していなくても可です。参加希望者は、以下の会員に電話にてご連絡ください。

佐藤 治夫：

高橋 祐子：

須田 理恵：

相良 英明

編集・発行：英米文化学会編集委員会＝池田 広子、小川 喜正、岸山 睦、武井 朗子、中村 豪、  
宮崎 敬子、山根 正弘

発行責任者：中村 豪

〒

電話